
へたおん！

火野村祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へたおん！

【Nコード】

N2271K

【作者名】

火野村祭

【あらすじ】

ヘタリアキャラクターたちが繰り広げる、「けいおん！」

プロローグ（前書き）

ド素人です。文章力皆無です。お見苦しい所もありますがよろしく
お願いいたします。

ちなみに「けいおん！」の原作コミックスをもとに作成したもので
すのでアニメとは少し違うと思いますがよろしくお願いします。

ブローグ

「アーサー~~~~!!!!」

元気にそう友人の名前を呼ぶのは、この春入学したばかりの一年生、アルフレッド・F・ジョーンズだ。

名前を呼ばれたアルフレッドの友人、アーサー・カークランドが振り向く。

「アルフレッド。何だ？」

「クラブ見学に行こう！」

「クラブ見学？」

アーサーは少し首をかしげる。

「軽音部だよ軽音部！」

アルフレッドが少しテンションを高くして言う。

「でも俺文芸部に入るつもりだし……」

入部届も書いたし、とアーサーはアルフレッドに自信の文芸部の入部届を渡す。

ビリーーーーー

（アルフレッドが入部届けを破く音）

「あーーーーーっ!!!!?」

「何すんだよアルーーーーっ!!」

「ほら行くぞ早く早く」

アルフレッドはアーサーの声をことごとく無視し、無理矢理アーサーの手を引きながら走って音楽室へと向かった。

- 音楽室 -

「……へ？」

「廃部した？」

驚くアルフレッドの隣ではアーサーが走ってきたせいで息を乱している。

「正確には廃部寸前だな」

そう言うのは、教師のフランシス・ボヌフォアだ。

「昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって、今月中に4人入部しないと廃部になっちゃうんだよ」

先生ー

「あ、ごめんな 呼んでるから」

がんばって!と言うと、先生は行ってしまった。

「……………」

「なんか、優しそうな先生だったな」

「でも廃部なら仕方ないな 俺は文芸部に…」

そう言っつて音楽室から出て行こうとするアーサーの襟をアルフレッドがむんずとつかむ。

「誰もいないって事は、今入部すれば俺が部長…
ふふ…悪くないな」

「……………（「A」）」

アーサーは呆れて何も言えなかった。

ガラッ

そのとき、音楽室の扉が開き、一人の男子生徒が入ってきた。

「あのー……………」

彼もこの春入学したばかりの一年生、名前は本田 菊。

「見学したいんですけど…」

「軽音部の！？」

アルフレッドが、菊の肩をガッとかむ。

「いえ、合唱部の…」

「軽音部に入らないか？今部員が少なくて…」

「こら！！そんな強引な勧誘したら失礼だろ！！」

アーサーが、強引な勧誘を始めたアルフレッドを菊から引き離す。

「それじゃ 俺も行くから…」

そう言ってアーサーは、音楽室から出て行こうとする。

「アーサーっ！！」

「あのときの約束は嘘だったのか！？俺がドラム アーサーがベースでずっとバンド組もうって！！」

「アル…」

アルフレッドの声にアーサーは立ち止まり、振り向く。

「それでプロになったらギャラは7：3なって」

「捏造するな！！」

ゴンッ

アーサーがアルフレッドの頭にチョップを食らわせる音

ぷっ…

くすくす…

「なんだか楽しそうですね

キーボードくらいしか出来ませんが、私でよければ入部させて下さい」

菊のその言葉で、アルフレッドの顔は笑顔に、アーサーの顔は驚きの顔に変わる。

「ありがとーっ！！これであと一人入部すればっ！！」

「…俺ももう人数に入ってたんだ…」

アルフレッドはとても嬉しそうだ。アーサーは諦めの表情が出ている。

「あとは ギターだな！」

ブログ（後書き）

文章力なくてすみませんorz
詳しく知りたい方はけいおん！コミックスのお買い求めをおすすめします。

第1話（前書き）

やっと第1話です。

生暖かく見守ってやって下さい。

第1話

「……うん…」

教室の自分の机でうなっているのは、この春からの一年生、フェリシアーノ・ヴァルガスだ。

「何をうなってるんだフェリシアーノ」

そうフェリシアーノに声をかけるのは、フェリシアーノの友人、ルートヴィツヒ・バイルシュミットである。

「ヴェー、ルート…実は、どの部活に入ろうかまだ迷ってて…」

「何！？まだ決めてなかったのか？もう学校始まって2週間経ってるぞ？」

「でもでも 俺 運動音痴だし文化系のクラブもよくわからないし…」

フェリシアーノが困惑の表情で言う。

「はあ……こうやってニートが出来上がっていくんだな…」

「部活していないだけでニート!？」

ルートヴィツヒの言葉に、フェリシアーノはガーン、とショックを

受けるのだった。

それからしばらく。

「とりあえず軽音部ってとこに入部してみた!!」

昼ご飯中、フェリシアーノが自信ありげに言い出す。

「ほー…で、軽音部ってどんなことをするんだ?」

「さあ?」

即答。

「え…」

驚くルートヴィッヒを気にも止めず、フェリシアーノはまぐまぐとピッツアを食べている。

「ヴェー、でも 軽い音楽って書くから きっと簡単なことしかやらないよ!」

口笛とか！

「何だそのやる気のないクラブ」

「ほら 何かバンドとかするみたいだぞ？」

何をする部なのかを確かめるために、掲示板を見に来た二人。

「ヴェー？俺、ギターなんて弾けないよ…」

「じゃあ何なら弾けるんだ？」

一瞬の沈黙。

「カ…カスタネット？」

ルートヴィッヒは一瞬フェリシアーノがカスタネットを演奏しているところを想像する。

「……すごく似合うな」

その日の放課後。

「ヴェー……ここか……」

フェリシアーノは音楽室の前に来ていた。

「入ったばかりで言いにくいけど……やっぱり辞めるって言おう……
……軽音部ってどんな人がいるのかな？」

フェリシアーノの想像図には、某デスメタルバンドのリーダー的な人が描かれていた。

《ああん！？辞めたいだとお！？　ただで辞めれると思ってんのか
KILL!!!!》

あわわわわわわわ

自分の想像で慌てるフェリシアーノだった。

ポンッ

「ひいつ!？」

急に肩をたたかれ、ビクッと驚くフェリシアーノ。

「うちの部の前で何をやっているんだい？」

びっくりした…とフェリシアーノが振り向くと、そこにいたのはアルフレッド・F・ジョーンズだった。

「あ、もしかして君、入部希望のフェリシアーノ・ヴァルガスくんじゃないかい？」

ギターがすごくうまいんだって!？来てくれるの待ってたんだぞ
ー!」

アルフレッドはそう言ってフェリシアーノの手をガシッとにぎる。

（なんかあらぬ尾ヒレがついてるー！？）

「みんなー！入部希望者が来たぞー！！」

困惑するフェリシアーノの手を引き、アルフレッドは音楽室へと飛び込むように入る。

「本当か！」

そう言うのはすでに音楽室にいたアーサー・カーランドだ。隣には本田 菊もいる。

「ようこそ 軽音部へ！」

「歓迎いたしますー！」

二人はフェリシアーノに駆け寄り、満面の笑顔で歓迎の言葉をかける。

反対にフェリシアーノはどんどん困惑していく。

「よしっ菊お茶の準備だ！」

「はいっ」

(ど…どうしよう 辞めるって言いつらい…)

「…実は、俺たちも今年の新入部員なんだけど…先輩達がみんな卒業してしまつて、今部員が俺たち三人だけなんだ」

アルフレッドの話を、フェリシアーノは出されたお茶を飲みながら聞いている。

「部員が4人いないとクラブとして認められなくて1週間以内にあと1人集まらなかつたら廃部になるところだったんです」

「本当に入部してくれてありがとう…!!」

アルフレッドがフェリシアーノの手をガシッと握る。

(ますます言いつらいー!!!!)

どうしよう、と本気で困惑するフェリシアーノだった。

第1話（後書き）

ありがとうございます…恐れ入ります、すみません。

見て下さった方にただただ感謝です。

第2話（前書き）

第2話です。

よろしくお願いします。

第2話

「え…？ 辞めるって言いに来たのかい？」

「そ…そうなのか…」

ガク…

アルフレッドの落ち込みように、フェリシアーノは慌てる。

「ヴェー、も、もっと違う楽器やるんだと思って…」

「え？じゃあ何なら出来るんですか？」

「カスタネ…ハ ハーモニカッ！！」

見栄

「あ ハーモニカならあるんだぞ！吹いて見せ…」
「ごめんなさい吹けません」

まさかあるとは…と思うフェリシアーノだった。

「でも うちの部に入ろうと思ったってことは、音楽には興味ある
ってことだよな？」

アーサーがたずねる。

「他に入りたい部活とかあるんですか？」
続いて菊も。

「う ううん特には…」

「それならさ 俺たちの演奏一度聞いてから入部するかどうか判断
しないかい？」

アルフレッドが提案する。

「ヴェー、演奏してくれるの？」

「もちろんいいんだぞっ！」

ニコー

（せっかくの力モをここで手放すわけにはいかないんだぞっ！！）

笑顔とは裏腹にそんなことを考えるアルフレッドだった。

そして、アーサーがベース、菊がキーボード、アルフレッドがドラムで演奏を始める。

ジャン…

「えへへ…どうだったかい？」

演奏が終わって、アルフレッドがフェリシアーノに訪ねる。

「ヴェー…なんていうか、すごく言葉にしにくいんだけど…」

…あんまりうまくないね!」

（バツサリだー！ー！）

フェリシアーノの言葉に、結構ショックを受けるアルフレッドだった。

「でもなんだか 楽しそうな雰囲気伝わってきた！

俺、この部に入部するよ！」

ワッ

3人から、喜びの声上がる。

「ありがとう これから一緒に頑張ろうな！」

アーサーが、フェリシアーノの手を取って言う。

「あ…でも俺全然楽器できないし…」

「あ！マネージャーとかどうかな！？」

「いや、運動部じゃないんだからよ…」

名案！とばかりに言うフェリシアーノにアーサーがツッコんだ。

「そうだ！せっかくだから入部と同時にギターを始めてみたらどうでしょうか？」

「あ それいいんじゃないかい？」

「この部 ギターいないしな」

「ヴェー…で、でもギターってすごく難しそうなイメージが…」

フェリシアーノがこまったような表情で言う。

「大丈夫なんだぞ！ 俺たちもわかるところは教えるし」

「ヴェー！そうだね さっきの演奏聞いてたら俺にも出来るかもって思えてきた！」

自信わいてきた！という顔でフェリシアーノが言う。

「それはよかった」

そう言うアルフレッドの笑顔は引きつっていた。

次の日のお昼。

「え！？結局軽音部に入ったのか」

ルートヴィッヒが驚愕する。

「うん、どうしても入部してほしいって言われて」

「マジか!？」

一瞬の沈黙。

「ああ！マネージャーとしてとかな!」

「人に言われると何か悔しい…」

「ちゃんと部員として入ったんだから!」

ぶんすか、とフェリシアーノが言う。

「ギター1から教えてくれるんだって」

「ほお… フェリシアーノがギターをねえ…」

ルートヴィッヒはまだ半信半疑という目で見ている。

「あ　ということは新しくギター買ったりするんだな」

「……5000円くらいで買えるよね？」

ぽわーん

こんな奴つかまされて大丈夫か軽音部…と思うルートヴィッヒだった。

第2話（後書き）

フェリがやつと軽音部に正式入部。
次も頑張ります・・・！

第3話（前書き）

なんだか久しぶりの投稿です…！
今回もどうぞよろしくお願いします！

第3話

「フェリシアーノ、一緒に帰らないか？」

鞆を肩にかけたルートヴィツヒが、フェリシアーノに声をかける。

「あ、ルート」

「ごめん 今日どうしても部活に行かなきゃいけないんだー」

フェリシアーノがノートや教科書を片付けながら苦笑いで答える。

「あ、そうなのか…じゃあ仕方ないな」

（フェリシアーノにも打ち込めるものが出来たんだな…嬉しいような悲しいような…）

「今日は菊がおいしいお菓子持ってきてくれるんだー」

「ギターやるんじゃないのか!？」

* 音楽室 *

「ねえねえなんでアーサーはギターじゃなくてベースをやるうと思つたの？」

《ベース担当のアーサー、かつこいい大人の男の人って感じです。》

「え、
だってギターは…」

は…はずかしい」

「はずかしい!？」

少しだけ頬を赤らめて答えたアーサーに驚くフェリシアーノ。

「ほら、ギターってバンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなきゃいけないし

観客の目も自然と集まるだろ?」

「あー…なるほど」

「自分がその立場になるって考えただけで…」

シュー…

頭から湯気を出しながら、白目をむいて倒れていくアーサー。

「アーサーっ!？」

《…あと少し繊細です。》

「菊はキーボードうまいよね
キーボード歴長いの?」

《キーボード担当 菊、おっとりばわしたかわいい人です。》

「私、小さい頃からピアノを習っていたんです。コンクールで賞を
いただいたこともあるんですよ」
にここに

「へ…へえーすごいねえ」

(なんで軽音部にいるんだろう…)

《…あと、いいところのお坊ちゃまっばいです。》

「皆さん お茶が入りましたよー」

菊がお茶をお盆にのせて運んでくる。

お茶を飲んでいる時。

「そう言えば、ずっと疑問に思ってたんだけど
この部屋って、やけに物がそろってるよね
最近の学校ってこんな感じなのかな？」

「ああ それは私の家から持ってきたんですよ」
「自前!？」

《…かなりのお坊ちゃまっばいです。》

「アルフレッドはドラムっって感じだよね」

「んなっ!？俺にもちゃんと始めた理由があるんだぞ!」
聞いてくれよ!

《ドラム担当のアルフレッド、元気いっぱいの明るい男の子です。》

「へえ〜 どんな?どんな?」

「それは えーっと… あれだよ」

「… かつこいいから（こによこによ）」

「ないんじゃない」

「だ、だつてさー！！ギターとかベースとかキーボードとか
指でちまちまするのを想像しただけで…」

「キーーーーー！！！！」

ガシガシ、と頭をかくアルフレッドにビクッと驚くフェリシアーノ。

「… っ っ っ なるんだよ」

息を切らすアルフレッド。

（楽器選びにも性格出るんだなあ…）

驚きでときどきと心臓を鳴らしながら思うフェリシアーノだった。

第3話（後書き）

ありがとうございました。

次回は憂ちゃんが出てくる回ですよw

第4話（前書き）

第4話です！今回は、ギター購入&弟登場！
相変わらず駄文ですが、楽しんでいただけたら幸いです

第4話

「そういえば、フェリシアーノってもうギターは買ったのか？」

アーサーがフェリシアーノにたずねる。

「ヴェ？ギター？」

間。

「あーそつか俺ギターやるんだっけ！」
わすれてたー

「…軽音部は喫茶店じゃねえぞ？」

「ギターってどれくらいするの？値段」
フェリシアーノがアーサーにたずねる。

「うーん…安いのは1万円台からあるけど、あんまり安すぎるのも
良くねえから、
最低でも3万円くらいのがいいかもな」

「さんまんえん！？」

「俺のおこづかい半年分…」
あわわわわ…

「高いのは10万円くらいするのもあるぜ？」
アーサーがにやりという感じの顔で言う。

フェリシアーノはアルフレッドのほうを向き、

「部費で落ちませんか？」

「落ちません」

笑顔で言ったら、笑顔で即答された。

次の休日、みんなで楽器屋さんに行くことに。

「あつフェリシアーノっ こっちこっち！」

フェリシアーノが待ち合わせ場所に行くと、もうすでにみんなが待っていた。

「お金は用意できましたか？」
「うん、お母さんに無理言って5万円前借りさせてもらった」

「お金っていつ必要になるかわかんないよね…
これからは計画的に使わなきゃ！」

…いけないんだけど…
この服いい…今なら買える…」

言ってるそばから洋服店のショーウィンドウに張り付いて、服を見
つめるフェリシアーノ。

「くらくらくらくら！ー！」

アルフレッドがフェリシアーノの服をひつつかんで、ショーウィ
ンドウからひっぺがすのだった。

楽器店

「うわーっ！ー！
すごいギターがいっぱい！」

フェリシアーノが感嘆の声を上げる。

店の中を進んでいくと、ふと、ツインネックのギターが目に入る。

フェリシアーノの想像図には、四本腕の人が『こんにちは』と言っている図が描かれている。

?????

「フェリシアーノ、なにしてるんだい？こっちこっち」

「うーん…いろいろありすぎて どれがいいのかわかりませーん」
頭に？マークをうかべるフェリシアーノ。

「何か選ぶ基準とかあるのかな？」
むむむ…

「もちろんあるぞ」
気づいたアーサーが声をかける。

「ギターって音色はもちろん、重さやネックの形や太さもいろいろあるんだ」

だから「あ、このギターかわいいー」

（聞いちゃいねー！！）

「でもこのギター15万もするぞ?」

値段を見たアルフレッドが言う。

「あ…本当だ…」

「ヴェー…これはさすがに手が出ないや…」

「このギターが欲しいんですか?」

フェリシアーノの後ろから、菊がひよこつとのぞく。

「ちょっと待ってて下さい」

そう言って店員の所へに行く菊。

「あのー…ギターのお値段負けていただけないでしょうか?」

「あ…あなたは社長の息子さん!!」

ひいつ!!

「このギター、5万円で売って下さるそうですよ
にここに」

「ほ、本当かい!?!」

「何!?何やったの!?!」

＊その日の夜 フェリシアーノの家＊

「えへへ…かわいいなあ…」

ギターを見てつばやく、パジャマ姿のフェリシアーノ。

「持ってみたりして…」

うをっ！ミュージシャンっぽい！！」

ギターをかついで、鏡の前に立つフェリシアーノ。

「サ、サインの練習しなきゃ！」

フェリシアーノがハイテンションになっていると、

「兄貴、うるさい…」

弟のロヴィーノが、文句を言いに来たのだった。

夜は静かにしましょう。

* 次の日の朝 *

「兄貴ー！？」

早く起きないと遅刻するぞー！？」

制服姿のロヴィーノが、階段下から声をかける。

「……兄貴？」

ロヴィーノが、扉を開けて部屋をのぞくと、

「添い寝！？」

ギターと添い寝するフェリシアーノの姿があったのだった。

第4話（後書き）

今回もいろいろすみませんorz

余談ですが、最近の双子は後に生まれた方が兄or姉だとか。

これからうちのロヴィには口は悪いけど兄貴大好きないい弟をやつてもらおうと思っています。

有り難うございました。次回もがんばります。

第5話（前書き）

第5話です。

相変わらずの駄文。どうぞよろしく願います。

第5話

* 音楽室 *

ジャーン、と、どこからともなく効果音が聞こえてきそうな感じで、ギターを担ぎ堂々と立つフェリシアーノ。

おおー、と他の3人から声が上がリ、拍手が起こる。

「ギター持つとそれらしく見えるな」
アーサーが言う。

「なあ何か弾いてみてくれよ!」
続いて元気なアルフレッド。

「……………」

チャラリ〜ララ〜

「チャ メラ!?!」

「フェリシアーノ、家でギター練習してないのか?」

アーサーが心配そうに言う。

「家じゃほったらかしなんじゃないのかい？」

「そ、そんなことないよーっ！」

「すごい大事にしてるんだよ？ほこりがついたらふいたり
鏡の前でポーズとってみたり、添い寝してみたり、写真撮ってみたり

ボーツと眺めてて一日が終わっちゃうなんてこともしょっちゅう…」
「弾けよ」

「いやーギターってきらきらぴかぴかしてるから
なんか触るのが怖くて…」

「ああ、分かる分かる

そっいえばギターのフィルムもはずしてねえもんな」

両手の人差し指を合わせながらフェリシアーノが言うと、アーサー
が同意の声を上げた。

「…フェリシアーノってもしかして携帯のモニタのフィルムもはが
してねえんじゃないの？」

「ヴェーすごい！なんでわかったの！？」

その2人の後ろでは、アルフレッドがうずうずしていました。

うずうずしている理由は、

フェリシアーノのギターのフィルム。

「えーいつ！！」

ビリーツ

（アルフレッドがギターのフィルムを剥がす音）

「ああー！ーっ！？」

我慢が出来なくなったアルフレッドは、フェリシアーノのギターのフィルムをはがしてしまい、それに驚いたフェリシアーノが声を上げた。

.....

ぶる　　ぶる

…フェリシアーノが泣きそうです。

「な…なんちゃってなんだぞー…」

ずーん…

フェリシアーノは体育座りで落ち込んでしまった。

あわわわわわわ

アルフレッドは慌てます。

「ほら あやまれ」

「ごごめんっ ほんの出来心だったんだー！」

アーサーに促されてアルフレッドが謝る。

「ほーらー！！菊が持つて来たお菓子だぞー！」

どうにか落ち込むフェリシアーノを立ち直らせようとするアルフレッド。

「そんなんでは機嫌が直るわけ…」

アーサーが口を開くと、

もぐ もぐっ

お菓子を明るいい顔で食べ出すフェリシアーノ。

（なおったーーーーー！？）

単純なフェリシアーノに、驚くアーサーだった。

「そうだよね… やっぱりギターって弾くものだよね…

ただ大事にしてるだけじゃギターもかわいそうだよね」

お菓子を食べるのを中断して言うフェリシアーノ。

「ありがとうアルフレッド

俺 やる気でてきたよ！」

「お？…おお そ、そうかい？」

「うん！フェリシアーノがギター練習するきっかけになると思ったんだぞ！」

さすがお^{トス}うっ！」

「調子にのるな」

得意げになっているアルフレッドの脇腹に、アーサーが肘を入れた。

「お…おお…」

キレイにアーサーの肘が入ったアルフレッドは、壁に手をつき痛みを耐えていた。

「ヴェー、それにしても…このお菓子すっごくおいしいよー！」

「菊、こんな高そうなお菓子いつももらっちゃっていいのかな？」
お菓子を食べながらたずねるフェリシアーノ。

「いいんですよ いつもいろんな方からいただくんですけど、家に置いておいても余らせてしまうだけですから、皆さんに食べていただいた方がいいんですよ」
にっこり

（いろんな人から余るほどお菓子をもらっ家ってどんな家！？
どんな家ー！？）

お菓子を食べる手を止め、驚くフェリシアーノだった。

第5話（後書き）

変なところで切ります。

今回も有り難うございました。

次回は久々（？）にルート登場。

第6話（前書き）

第6話です。

今回は久々（？）にルートが出ますよ！

相変わらずの駄文です！よろしく願いますっ！

第6話

「そういえば、どうやってギターでライブみたいな音出すの？」

フェリシアーノが頬に人差し指を当て、疑問のポーズで言う。

「ああ、アンプにつないだら出るぞ
つないでみるか？」

アーサーが音楽室のすみにあるアンプを指さしながら言う。

アンプにギターをつないで、音を出してみる。

ジャラーン

「おおー！！かっこいいー！！」

「…まだチャ　メラしか弾けないけど」

チャラリ〜ララ〜

「アンプで音を出すのはもう少し練習してからだね…」

トホホ…と言うフェリシアーノを菊が困ったような笑いで見ている。

アンプにつないだコードを、フェリシアーノが抜こうと引く。

「あっ！！フェリシアーノ あぶねえっ！！！」

「へ？」

アーサーの声が聞こえたのは、フェリシアーノがコードを抜く瞬間だった。

ボンッ！！！！！！！！

アンプからものすごい音量の音。

もちろんコードを抜いたフェリシアーノはアンプのすぐ前に居るわけ。

「アンプのボリューム下げる前にコード抜くとそうなっちまうんだよ…」

「だいじょぶか？」

「ヴェー……は……早く言って……」

アーサーの声にそう答えるフェリシアーノは、耳がキーンとなっていた。

「ギターの弦って怖いよねー

細くて硬いから指切っちゃいそう」

ギターの練習をしていたフェリシアーノが、アルフレッドに言う。

ピン

アルフレッドはひらめいた。

「そうなんだぞー

気をつけないと指がスパーーーーッと切れて血がドバーーーーッと

……」

「ッきゃーーーーー！！！！！！」

「……なんでアーサーが悲鳴を…… フェリシアーノを驚かそうとした

のに……」

「ヴェー、かわいい悲鳴？」

「い……痛い話はだめなんだ……」

アーサーはうずくまって手で耳を塞ぎ、ぶるぶるとふるえていた。

「おほんっ、ギター練習してるうちに指の先が硬くなるから、血が出たりすることはないよ」

復活したアーサーが、取り乱してしまった恥ずかしさで顔を赤らめながら言う。

「ほら、俺はベースだけど」

そう言っただけでアーサーはフェリシアーノに手を差し出す。

「ヴェー 本当だ」

フェリシアーノは差し出されたアーサーの手の指先を触って言う。

ぷに ぷに

ぷに ぷに ぷに ぷに

「あの……フェリシアーノ？」

ぷに　ぷに　ぷに　ぷに　ぷに

「も…もうちよつとだけ」

「ギター練習するって言っても、いったい何から始めていいやらわかんないや」

フェリシアーノが腕を組んで言う。

「とりあえず最初はコードを覚えるといいぞ」

そう言ってアーサーが手渡したのはコードが書かれている冊子だ。

「わ、ありがとう」

冊子を開き、コードを眺めるフェリシアーノ。

・・・

ぷしゅうううう

（フェリシアーノが頭から煙を出す音）

「ま…まずは楽譜の読み方から教えてください…」

「そこから!？」

下校時

「それじゃまた明日ー!」

みんなに手を振るフェリシアーノ。

帰り道でもコードを練習します。

「C…D…」

「フェリシアーノっ!!」

名前を呼ばれたフェリシアーノは振り向く。

「あ!ルート!」

ガッ!と上げた手はコードを押さえる形になっていた。

「…何だそれ新しいあいさつか?」

「えへへ 今日ギターのコードを教えてもらったんだー」

「ほー、頑張ってるんだな」

ルートヴィッヒとならんで歩くフェリシアーノが笑顔で話す。

「ヴェー、そういえばルート　今日は帰るの遅いんだね？」

「ああ　図書館で中間テストの勉強をしていたからな」
「へえ」

てくてく

「え！？中間テスト！？」

フェリシアーノがビシッとあげた手はまたコードを押さえる形になっていた。

「…それもコードか？」

「そっかあ…もう中間テストなのかあ…」
「はあ…とフェリシアーノが溜息をつく。」

「せっかくがんばってギター練習しようと思ったのに…」

「……………」

「…お前　今まで試験勉強なんてしたことなかったじゃないか」

「そっかー　なら大丈夫だね」

「いや…大丈夫じゃないが…」

明るくウィンクして言うフェリシアーノに突っ込むルートヴィッヒだった。

第6話（後書き）

テストとかマジめんどいですよね。
有り難うございました。

第7話（前書き）

第7話でございます…

なんか新連載とかやってたらこっち忘れてましたorz
こっちもがんばんなきゃ！軽音なみんなに萌えるために

第7話

* 音楽室 *

「うーんっ やっとテスト終わったんだぞー!!」

そう言って大きくのびをするアルフレッド。

「高校に入って急に難しくなって大変でした」

眉をハの字にして微笑むのは菊だ。

「そうだな…そして」

アーサーが振り向いた視線の先。

どよーん……

「もっと大変そうなやつがここに…」

テストの答案用紙を手に暗いオーラを出すフェリシアーノがいた。

「そ…そんなにテスト悪かったのか？」

フェリシアーノのものすごく暗いオーラに、おそろおそろアーサーが聞く。

フェリシアーノはアーサーに答案用紙を手渡す。

「ヴェー…クラスで1人追試だつてさ…」

うつろな目で言うフェリシアーノ。

アーサーは、手渡された答案用紙の右上の、12という数字を見てうわぁ…と思った。

「大丈夫ですよ！今回は勉強の方法が悪かっただけじゃですか？」

「そうなんだぞ！ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕！」

慌てて励ましの言葉をかける菊とアルフレッド。

「…勉強は全くしてなかったけど…」

「励ましの言葉返せなんだぞ」

フェリシアーノの言葉に額に怒りマークをつけたアルフレッドだっ

た。

「なんで勉強しなかったんだい？」

腰に両手をあてて言うアルフレッド。

「いや…しようと思ってただけど…」

なんか試験勉強中ってさ、勉強以外のことに集中できたりしない？」

苦笑いで言うフェリシアーノ。

「あーそれはあるね 部屋掃除はかどったりとか」

「勉強の息抜きにギター練習したら抜け出せなくなって
結局全然勉強できなかったんだ」

でもおかげでコードほとんど弾けるようになったよ！」

びし！とピースした手を突き出して言うフェリシアーノ。

「いや、すごいけどな…その集中力を少しでも勉強に回せば…」

苦笑いで言うアーサーだった。

「というか、そう言うアルフレッドはどうだったのさー！」

「ん？俺かい？」

「余裕なんだぞ！
この通り！」

バーン、という感じで答案用紙を突き出すアルフレッド。
右上に書かれた赤い数字は89。

フェリシアーノはアルフレッドの答案用紙を手取る。

どうだ、と言わんばかりにふんぞり返るアルフレッド。

「……こんなのアルフレッドのキャラじゃないよ……」

「なんだって！？どついう意味だい！！」

フェリシアーノの言葉に、くわっ、となって言うアルフレッド。

「俺はヒーローだからなんでもそつなくこなすんだぞ！」

HAHAHAと笑ってアルフレッドは言う。

「うう…アルフレッドは俺の仲間だって信じてたのに…」

笑うアルフレッドを見ながら、涙目のフェリシアーノが言う。

「…テスト前日に勉強分らないって泣きついてきたのはどこの誰だっけ」

によによ顔のアーサーが横からそう言う。

「あつ！？バラさないでくれよ！！」

顔を少し赤くしたアルフレッドが言い返す。

「それでこそアルフレッドだよ！」

「赤点とつた君に言われたくないんだぞー！！」

がしつとアルフレッドの肩をつかんで言うフェリシアーノに、叫ぶようにしてそう言うアルフレッドだった。

「とりあえず追試で合格点取るまで 部活動は禁止だって…」

ようかんを食べながらフェリシアーノが言う。

「え！？そ…そしたら部室にいるのもまずいんじゃないかい！？」

フェリシアーノの言葉にみんなが驚く。

「ヴェー、大丈夫だよ お菓子食べに来てるだけだし」

笑顔で言うフェリシアーノ。

「そっかそれなら安心だね！」

笑い合うアルフレッドとフェリシアーノ。

……

「なんでやねなんだぞ」

腕でフェリシアーノの首をしめるアルフレッド。

「ぎ、ギブギブツ!!」

「……というわけで、アーサー助けて」

「え……俺？」

アルフレッドから解放されたフェリシアーノがアーサーにすがりつく。

「……仕方ないな……それじゃ今日勉強会するか！」

「本当!?!」

アーサーの言葉に嬉しそうな顔をするフェリシアーノ。

「フェリシアーノもアーサーに教えてもらえば確実に合格点とれるよ！」

「うまいんだぞ?アーサーは……」

「一夜漬け術教えるのが!!」

「うおーい!! 印象悪いな!! 普通に勉強教えるよ!!」

アルフレッドの言葉にツツコミを入れるアーサーだった。

第7話（後書き）

テスト氏ね。 （コルコルコルコル…）

中間テストまじめんどいよー

テスト週間早く帰れるところはいいけどさ。

読んで下さりありがとうございました。 次も頑張ります

第8話（前書き）

どうも火野村祭です！長らくお待たせいたしましたすみません！
いやぁテストやら部活やらなんやらで…中学って大変ね

今回のお話ロヴィが出るんですけど、かなりキャラ違いますので、
注意願います。あのロヴィが礼儀正しいよ！

それでは第8話、よろしくお願いします！

第8話

フェリシアーノの家で勉強会をすることに。

「ただいまー！」

みんなあがってあがって！」

「お邪魔します」

フェリシアーノの家に初めて来る3人です。

「兄貴おかえりー」

…あれ？友達？」

ロヴィーノが部屋から出てきて、3人を見る。

「はじめまして弟のロヴィーノです 兄がいつもお世話になってます」

礼儀正しく3人にぺこりとお辞儀をするロヴィーノ。

（（出来た子だー！！！！！！！！）（））

兄と比べしつかりした弟に3人は驚愕するのだった。

フェリシアーノの部屋

「……いやー……」

兄弟でこつも違うものかい？」

「何が？」

アルフレッドの言葉に首をかしげるフェリシアーノ。

「弟にいい所全部吸いとられたんじゃないのかい？」

「ひどーい！……！」

「……あの……」

アルフレッドとフェリシアーノが話していると、ロヴィーノが入ってきた。手にはお茶とお菓子がのったお盆。

「皆さんよかったですらお茶どうぞ 買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど……」

微笑みながらそう言うロヴィーノに、

（（（本当に出来た子だー！……！！……！！……！！）））

と、再度驚愕する3人だった。

そして、勉強を始めたフェリシアーノ。アーサーが教え、その横では菊が見ている。

「????」

「ここが…」

「あー、なるほど！」

そんなやりとりをするフェリシアーノとアーサーの後ろでは、アルフレッドがベッドに腰掛けて暇そうな顔をしていた。

「ひまー!!」

そう言っただけでベッドに少し寝転がったり、

ぐる　ぐる

椅子に座って回ったり、

「お、マンガ！」

本棚からマンガを出してきたり

「あっははははは!!!!」

「あーもっつ!!!!」

マンガを読んで大笑いし始めたときアーサーの我慢の限界がきた。

「.....」

しゅん.....

静かになったアルフレッドの頭にはたんこぶができていた。
ついさっきアーサーにつくられたものだ。

勉強するみんなを見ていたアルフレッドは、足をもそもそとさせる
フェリシアーノの姿をとらえた。

「（小声）あ...足が...しびれ...」

ピン

アルフレッドはひらめいた。

「つーん!」

「うゃー.....っ!.....!」

しびれた足の裏をつつかれたフェリシアーノはがたんと立ち上がった。

アルフレッドは廊下に放り出され、バタンツと部屋の扉が閉められた。

アルフレッドの頭にはもう一つたんこぶが増えていた。

「……………」

フェリシアーノがうなる。

「ヴェエーだめだ〜やる気が続かない〜」

「おいおい…まだ30分も経ってねえぞ？」

机に突っ伏してしまふフェリシアーノを、アーサーが呆れたような顔で見る。

「フェリシアーノ君、ケーキ持って来ましたから後で食べましょう？
だからもう少し頑張って下さい」

「ケーキ……………」

菊が持っているケーキの箱を見るフェリシアーノ。

カリカリカリカリ

一気にやる気を取り戻し勉強を再開した。

「頑張ってください！」

(…さすが菊！！)

笑顔の菊を見てそう思うアーサーだった。

「できたっ！！！！」

問題を解いた紙を掲げて笑顔のフェリシアノ。

「これだけ解けたら大丈夫だろ」

腕を前に伸ばしたアーサーが言う。

「これで追試もしっかりできますね」

アーサーの隣の菊が言う。

「それじゃ私たちはそろそろ…」

菊が鞆を持つ。

「…あれ？アルは？」

リビングから間の抜けたようなゲーム音が聞こえる。

「うおっ 負けそう!」

そこにはテレビ画面の前でコントローラーを握りカチカチやっているロヴィーノとアルフレッドの姿があった。

(なじみすぎ!!!!)

アルフレッドを探しにきたアーサーは、寝転がりながらゲームするアルフレッドを見て思っのであった。

* 追試返却日 *

「大丈夫かフェリシアーノのやつ…」

音楽室でフェリシアーノを待つ3人。

ガラッ

音楽室の扉が開き、フェリシアーノが入ってきた。

「ど どうだった!？」

アーサーが聞く。

「…ど…どうしようアーサー」
ふるふると震えるフェリシアーノ。
「え…また駄目だったのか？」

「…100点取っちゃった…」
「極端な子っ！…！」

解答用紙を見せるフェリシアーノに驚くアーサーだった。

「とりあえずこれで一段落だな…」
「そうですね」

アーサーはほつと溜息をつく。

「ヴェー！みんなのおかげだよ、本当にありがとう！」
「いやあ〜それほどでも…」
「お前は何もしていない」

フェリシアーノの言葉に照れたようにするアルフレッドに、アーサーがツツコミを入れる。

「じゃあ追試合格祝いにカラオケでも行こうかー！」
「ヴェーおごってくれるの？」
「ないんだぞ」

そんなやりとりをするアルフレッドとフェリシアーノを見るアーサーと菊は、思う。

（（ギターの練習に復帰させるまでが「苦勞」《だ／＼ですね》…））
そうして2人で苦笑いをした。

第8話（後書き）

ありがとうございました！

いやあなんか書いてたら肩こっちゃいました。

次回もよろしく願います。

第9話（前書き）

なんか…久々！って感じがしますね。へたおんの更新。

今回は合宿になります…！

であ、どうぞ

第9話

本田家プライベートビーチ

「夏だ！」

「海だ！」

「泳ぐぞー！！！！！」

水着姿（水着は皆さんの想像で結構です）でそう叫ぶのはアルフレッド。隣にはビーチボールを持ったフェリシアーノもいる。

「おーい あんまりハメはずしすぎるなよー！！！」

少し遠くからそう言うのはこちらも水着姿のアーサーである。隣には菊。

「フェリシアーノ！水がしょっぱいんだぞ！」

「塩！塩だよアルフレッド！！！」

「き…聞いちゃいねえ…」

なぜみんながこんな所にいるかといえば、それは夏休み前にさかのぼります…

- 夏休み前 -

「合宿をします!!」

部室でアーサーがみんなに向けてそう言った。

「え？合宿!？」

「本当かいつ!?海!?山!？」

「遊びで行くんじゃないぞ！」

バンドの強化合宿!!朝から晩までみっちり練習するんだ!!」

はしやぎ出すフェリシアーノとアルフレッドにアーサーが言う。

「うわー 着ていく服買わなきゃ!」

「水着も買わないとな!」

「聞けーーーーっ!!!!!!」

「フェリシアーノが軽音部に入って数ヶ月経つのに、未だまともにバンドの練習したことないだろ?」

アーサーは言う。

「それはそうと…何で急に?」

?マークを浮かべるアルフレッド。

「夏休みあけたら文化祭があるだろ?」

「文化祭…!?!」

雷にうたれたようになるアルフレッド。

「はいはーいーい!! 執事喫茶やりたいんだぞー!!」
「俺おばけ屋敷ー!!」

「ここ軽音部!! ライブやるんだよ!!!!」

「うつ…ちょっとしたジョークなのに… というか何で俺だけ…」

そう言うアルフレッドの頭にはたんこぶが出来ている。もちろんアーサーがつくったものだ。

「でもアーサーなら執事服とか似合いそうだね あ、メイド服でもいいかも」

「なっ?!?!」

アルフレッドの言葉に、ビクツと驚いて顔を赤くするアーサー。

「お…俺が…」

アーサーは自分の執事姿とメイド姿を思い浮かべてもんとする。

「ぷぷぷ、なんてねー 冗談だよ冗談」

バキッ

「アルがいじめる…」

「おーよしよし」

菊に慰められるアーサーの少し後ろでは、たんこぶを増やしたアルフレッドが倒れていた。

「でも合宿っていつでもスタジオ付きの旅館なんてあるのかい？」

「俺 お金ないよ？」

「うっ…」

二人に言われて言葉に詰まるアーサー。

「き…菊別荘持ってたりしないか…？」

ぶーぶーと文句やらなんやらを言う二人を両手で制止しながら菊に言うアーサー。

「ありますよ？」

[illegible]

一人はてなマークをうかべる菊を見てそう思う三人だった。

「うわー！すー！い！」

別荘前。そう言ったのはフェリシアーナだった。

「で、でかいんだぞー！ー！ー！」

アルフレッドが驚愕の表情で言う。

「ねえ菊、本当にこんなところに泊まってるの？」
フェリシアーノが聞く。

「本当はもっと広いところに泊まりたかったんですが…」
一番小さい所しか借りられなかったんです ごめんなさい」

（これで一番小さいのー！？）

（…ていうか他にも別荘あるのかー！？）

菊の言葉にさらに驚愕するアルフレッドとアーサーだった。

「よーし 遊ぶぞー！！」

「おーっ！！」

「はやつっ！！……！」

すでに水着に着替えているアルフレッドとフェリシアーノを見て言うアーサー。

「おいおいここに来た目的は遊ぶことじゃ」
「突撃……！！！！！」

ダッと駆けていってしまうアルフレッドたち。

ぽっーん…ん

「……」

一人のこされたアーサー。

「…俺も遊ぶー!!」

涙目で荷物から水着をさがすアーサーを、アルフレッドとフェリシアーノがにやりとして見ていた。

第9話（後書き）

文才がどこかにころがり落ちてないかと思う今日この頃です…！！

ありがとうございました。へたおんもがんばって更新していきたい
と思います。

第10話（前書き）

今回は…これ、やばいですよ俺的にですけど…！

アーサーかわゆすwwww

あっ、では、どうぞっ！

第10話

きやつきやつと笑って、ビーチボールで遊ぶフェリシアーノとアルフレッド。

「うおー綺麗なことだなー」

周りを見渡してアーサーが言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アーサーをアルフレッドが無言で見つめています。

「？」

「くらえーーーー！！！！！」

バシッ！！！！！！！！

「ぶはっ！！！！！！」

・・・いきなり持っていたビーチボールを顔に投げつけました。

理由はご自由に妄想……まちがえた。想像してください。

「わー！！」

バチャンっ

「あっやったな！こんにゃろ！」

バシャンっ

「ひゃー！やったなっえいえいつ」

「うわっ負けるかーっ」

「わー！アーサーそれ見えてるだろー！！！」

「見えてないぜ！スイカはこっちなー！よつと！」

「うわたたっ！あああぶないんだぞー！！！」

「ごめんごめん（棒読み）」

「ぼーうーよーみー！」

「ふう〜遊んだんだぞ〜」

「あっ！！バンド練習！！！」

アーサーが思い出して大きな声をあげた。

「まったく…アルフレッドが遊ぼうとか言うからほとんど時間なくなっただじゃねーか…」

「一番楽しそうに遊んだのは誰だい」

「うわー立派なスタジオだなー！」

そう言うのはアーサーである。

「なあもう今日はやめにしないかい　遊び疲れたんだぞ……」
溜息をついてアルフレッドが言う。

「……そういえばさっき海で遊んでた時思ったんだけどアルフレッド……太ってないか？
最近ドラム叩いてないからじゃねえの？」

「わーーーーー……！」

ドドドドドドドドドドド

半泣きでドラムを叩くアルフレッドを見てにやり、とするアーサー
だった。

じゃーーーーん

「すごいです！弾けるようになってますね！」

「えへへっがんばったもん！」

フェリシアーノの演奏をきいて、菊がぱちぱちと拍手をし、それに得意気な顔でぶいっとピースをするフェリシアーノ。

「へっ…あとはチョーキングとかスライドとか、細かいテクニック覚えたら完璧だな」

フェリシアーノを見てあごに手を当てそう言うアーサー。

「チョーキング？」

きゆう。

「違う」

フェリシアーノの首を腕で絞めるアルフレッドに、アーサーがツツコミを入れた。

「チョーキングっていうのは音を出しながら弦を引つ張るんだよ
そうすると音程が上がるんだ」

アーサーがフェリシアーノに説明する。

「こんな感じ」
グワーン

「おおーっ！」

早速フェリシアーノも実践。

みょーん みょーん

「そうそう」

「あははははははー！！！！！」

「え！？そんなツボるところ！？」

いきなり笑い出したフェリシアーノにアーサーは驚いた。

「・・・うゝ」

フェリシアーノがうなる。

「もうギター持てない…」

そう言っつてフェリシアーノはギターをおろす。

「はやっ！！まだちょっとしか経ってないぞ！？」

フェリシアーノを見てアルフレッドが驚く。

「だあってこのギター重たいんだもーん！！」
ぺたんとフェリシアーノが座り込む。

「だから軽いやつ買えって言ったのに…」
アーサーが言う。

「誰だこのギター買うつて言ったの!!」
「お前だ」

- 夜 -

「ふう」

「気持ちい」

「まさか露天風呂まであるとはな…」

みんなで露天風呂につかっています。

「でもそんなに心配することなかったな」

「フェリシアーノ君もうまくなつてましたしね」
笑う菊とアーサー。

「だからもつと遊べばよかったのに!!!」
「誰だーーーーっ!!!!」

「俺なんだぞ」

「前髪なげえ…」

アルフレッドが、前髪をわけて顔をみせた。

「今日初めてみんなとあわせてみたけど・・・

すっごい楽しかった！やっぱり音楽っていいね！」

明るい顔でそう言うフェリシアーノ。

「合宿しようって言うてくれたアーサーのおかげだよ！

ありがとう、アーサー！」

「え?!あ…あう」

フェリシアーノにぎゅっ、と、両手で手を握られて顔を赤くするアーサー。

「アーサーってば照れてるんだぞー!!!!」

「ち、ちが・・・のぼせただけだー!!!!!!!!」

そうして過ぎていく合宿の夜でした。

第10話（後書き）

ありがとうございました。

しかしですね。2525動画へたおん動画がたくさんあるんですけどね。

これは…！

イタちゃん…！イタちゃんや…！

浪川さん仕事し…え？違うの？

第11話（前書き）

どうも、火野村祭です。

25 動のへたおん系動画のクオリティの高さとかに涙がでそうです。
。。

では、本編どうぞ！

第11話

「あいたっ！」

音楽室。ギターの練習中のフェリシアーノが声をあげた。

「手の皮がむけちゃったー」

「うわぁ…痛々しいんだぞ」

涙目で皮がむけた指をアルフレッドに見せるフェリシアーノ。

「あうう…ほらーアーサー見てー」

今度はアーサーに指を見せようとするフェリシアーノ。

「…アーサー？」

「見えない聞こえない」

アーサーはうずくまり手で耳をふさぎ目をつぶっていた。

「はーん？」

きらーんとアルフレッドの目が光る。

「あーっ！ー！俺もドラムの練習のし過ぎで手のマメがつぶれちゃったんだぞー！ー！」

アルフレッドが大声で言うと、ビクッ！とするアーサー。アーサーは両手で顔をおおっている。

ぶるぶる…とアーサーは震える。

アルフレッドはにやりとする。

「ほらほらーっ！ー！」

アルフレッドはアーサーの近くに来てで笑顔でそう言い、アーサーをからかうのだった。

「指の皮むいたらどんどん指先が硬くなっていくんだぞ」

「ほほー」

「だからと言ってギターがうまくなっているとは限らないけどね！」
「がーん！」

アルフレッドとフェリシアーノが話している。

…その後ろでは、菊がなんだか入りにくそうに出入口のところの柱に隠れるようにしていた。

「あれ？菊じゃないか」

「？どうしたの？」

会話をしていた二人が菊に気付いた。

「その…な、なんだか入りづらくて…Hな会話してるのかと…」

「ほえ？」

「そういえば面白いもの見つけたんだぞ！」

そう言ってアルフレッドが取り出したのは一冊の冊子…アルバムのようだった。

「ほら見てみなよ」

「何これ？」

アルフレッドが机の上でアルバムを広げる。

「昔の軽音部の写真みたいだぞ」
「ヴェ〜…すごいね」

アルバムの写真は、どれもこれも濃いメイクをしたメタル系の人達が写っていた。

「いつの時代のバンドだよって感じだよな！」

HAHAHAとアルフレッドが笑う。

「そ　そうだね〜」

（軽音部といえばこういうイメージしかなかった俺って…）

ちょっと冷や汗をかきながら思うフェリシアーノだった。

「そっといえば菊、さっきどこ行ってたの？」
フェリシアーノが菊にたずねる。

「学園祭のステージを借りる申請をしに行って来たんですけど…
軽音部ってまだちゃんとしたクラブと認められていないから断られてしまいました」

「へ〜」

「あ、この写真すごい」

・
・
・
・
・

「「へ？」」

「軽音部が部と認められていないだってー?!
もつと緊張感出して言ってくれよ!!!」

「す、すみませんっ」

「ヴェー、部員が4人あつまったら大丈夫じゃなかったの？」
「そのはずなんだけどなあ……」

アルフレッドは頭をかく。

「ていうか……クラブって認められてなかったのに……」

フェリシアーノは部屋を見渡す。

「……音楽室、好きに使ってよかったのかなあ……」

《ティーセット等持ち込み。》

「い、今まで何も言われなかったから大丈夫なんだぞ　きつと
ん」

「そ、そうかなー」

アルフレッドとフェリシアーノは少し冷や汗をかいている。

「とりあえずどうなってるか聞きにいくんだぞ！生徒会室かな？」
「そうですね」

菊がこまったような顔で言う。

「…………あれ？そういえばアーサーは？」
アルフレッドが周りをみわたす。

「ああ　アーサーなら」

「まだおびえてる」

「帰ってこーい！ー！」

フェリシアーノが指さしたところにいたふるえるアーサーを見てそ
う叫ぶアルフレッドだった。

第11話（後書き）

アーサーがwwwアーサーがwwwwww

有り難うございました！次回も頑張ります！

あとアニメのCDパロとかもやりたいと密かに思っておりますw

連5中心verの配役を考えてみた。

こんにちは火野村祭です！

ちよつとへたおん！の連5verを思いついたので公開してみます！

唯 アル

漣 アーサー

律 フラ兄

紬 イヴァン様

梓 にーに

和 《未定》

憂 誰？（マシューだよ！）

さわちゃん お菊さま

和役を誰かが決めてくれたらこっちも小説にするかもです。

こっちは大幅に改変ありっぱいし大変そうだけど…

まあ俺のこのへたおん！のおもいつきのもととは2525動画ですよ…

25動みれる人は、へたおん！でタグ検索かけてみてください。

ちょっと配役ちがったりもするんですけど。

以上、火野村でした。

第12話（前書き）

どうも、そろそろテスト週間だといっのにまったくやる気が出ない
火野村祭です。

今回は、顧問が、きまるんですけどね…

先謝っときます。さわちゃん役変えましたすみません。

では、本編をどうぞ。

第12話

生徒会室

「ん？」

「フェリシアーノじゃないか」

「あ、ルート！」

生徒会室へとやって来た軽音部の面々。生徒会室にはルートヴィッヒがいた。

「友達かい？」

「うん、幼なじみなんだー」

「どうも。」

「ルートって生徒会役員だったんだね！」

「ああ」

「本当に友達？」

今まで知らなかったのかい…と思いながらそう言うアルフレッドだった。

「……………うん」

やっぱり軽音部は部活のリストにないな

部活申請用紙提出してないんじゃないか？」

部活リストを見ながらルートヴィッヒが言う。

「…そういやアルが出すはずだったよな。

『俺が部長やるから俺が出す！』

…とか言って」

「あ…忘れてた」

「やっぱりてめえのせいかなぁあ！！」

「いひゃいひゃいひゃい！！」

アーサーがむにーっとアルフレッドの頬をつねる。

「……………」

それをルートヴィッヒが見ている。

「…なんというか…

軽音部ってフェリシアーノにピッタリだと思うぞ」

「ほえ？」

《フランシス・ボヌフォア先生。

我が校の音楽教師である》

《その綺麗な顔立ちと柔らかな物腰で

生徒だけでなく教師の間でも人気が高い》

《さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく…》

「……………なあ…」

「《ファンクラブが存在するほど人気がある》」

「さっきから何言ってるんだ？」

廊下を歩いていたフランシスは、後ろで喋っていたアルフレッドのほうを振り向いた。

「実は 軽音部の顧問になってもらいたんだっ」

「…だから俺のことよいしょしてたのね」

「…でもごめんな

俺、吹奏楽部の顧問しているからかけもちはちょっと…」

フランシスが申し訳なさそうな顔をする。

「……………」

アルフレッドは眉をハの字にする。

「本当にごめんな」

「《今まで声をかけてきた女の人の声は数え切れず…》」

「だ、だからおだてても無理ですっ!」

じーっ

フェリシアーノがフランスを見ている。

「?どうしたんだ?」

「先生ってこの卒業生?」

「?そうだけど... どうして?」

「さっき見た軽音部のアルバムに先生に似た人がいたから...」

ビクッ!とフランスが反応する。

「み...みんな ちょっと音楽室来てっ!!!」

「え...ど、どうしたんですか?」

「ほらこの人先生でしょ?」

「.....よくわかったねフェリシアーノ...」

フェリシアーノが写真の人物を指差す。その人物は派手なメイクをばっちりしていて、よく見ないとフランスだとは分らない。

「そうだよ…俺、高校の時この学校の軽音部にいたの…」
「い…意外でした」

涙目のフランスにアーサーがそう言う。

「それじゃギター弾けるんだね！」
「ちょっと弾いてみて下さいっ」

フェリシアーノが自分のギターを渡す。

「……………」
「………しゃーねーなー………」

（ ）（ ）（ ）目付き変わったーーーー？！（ ）（ ）（ ）

ピロリロピロリロピロリロ
「」「」「速弾き?!」「」「」

ピロリロピロリロピロリロ
「」「」「タツピング?!」「」「」

ギヤアアアアアアア

「」「歯ギター?!」「」
「俺のギター……」

「お前ら音楽室好きに使いすぎなんだよー！……！」

「い、ごめんなさい……！」

「やっぱり！」

「……うつうつ」

素に戻った

床に座りこみ、泣くフランス。

「先生になったらおしとやかなキャラで通すって決めてたのに……」

うつと涙を流すフランス。

「……先生……」

ぐずぐずと震わせるフランスの肩にすっ手をやりしがむアルフレッド。

「他のみんなにバラされなくなったら顧問やって下さいなんだぞ」
「ええーっ?!」

（アルフレッド、たくましい子……！）

アルフレッドを見てそんなことを思うフェリシアーノだった。

第12話（後書き）

有難うございました！

エリザ姐さんの活躍を期待していた人すみませんでした。

だって最近フラ兄好きなんだ…！どうしてもメイン（？）にしたかつたんだ…！

あと今回の話、菊が空気なのは原作でムギが空気だからです。

次回は…ふわふわ時間、きますよ！

第13話（前書き）

どうも、火野村です。

さっきけいおんのアニメ見てました。さわちゃん超活躍！
ライブでね…あれは…ヤバイよ。いや、俺の脳内で。

さわちゃんは俺の脳内ではフランスス兄ちゃんだからね。デスデビルだとさ、

「てめえら…」

デスデビルは こんなぬるっちいもんじゃねえ！！
今、本物つてえのを
見せてやる！！！！」

…ってね！きゃああ兄ちゃんかっこいいー！！！！

…あははは、では本編どうぞ！

第13話

＊音楽室＊

「さあ顧問も決まったことだし後は本番に向けて頑張るだけだね！」

「ほばむりやり顧問にされたんだけどね…」

ガッツポーズで意気込むアルフレッドと、隣で腕を組み溜め息をつくフランス。

「相変わらず音楽室好き勝手使ってるし…お菓子までもちこんで」

「まあまあ固いこといわずにさ！」

「まあまあじゃないっての全く！」

「先生もケーキおひとついかがですか？」

ぼこぼこ怒るフランスに菊が笑顔で言う。

「いただきますー！」

「む…おいしい…」

そういえば学祭でやる曲は決まったのか？」

ケーキを食べながらフランススが聞く。

「はい　オリジナル曲をやるうと思って」

「今　練習中なんです

お茶どうぞ」

アーサーと菊が笑顔で答える。

「先生　俺たちの演奏見てくれないかい？

ケーキも食べたことだしさっ」

「…仕方ないなあ…」

アルフレッドに、フランススがお茶を飲みながら答える。

「なんならついでに演奏中のパフォーマンスも教えてや」「それはいいんだぞ！」「」

黒い顔のフランススにアルフレッドがずばっと言った。

ジャーン…

「ふー、どうかな先生」

演奏が終わって、アルフレッドがフランスに聞く。

「そうだねえ…」

いろいろ気になる事はあるけど…まず」

「ボーカルはいないの？」

（（あ　っ））

「オリジナルってことは歌詞も作らないといけないんじゃないの？」

「あ…歌詞なら作ってみました」

おずおずと恥ずかしそうにアーサーが紙を出す。

「わー見せて見せて！」

「え…でも恥ずかしいっ…」

後ろから覗き込んできたフェリシアーノに、慌てて紙を隠すアーサ
！。

「えゝ見せてよー！」

「で…でも…」

フェリシアーノとアーサーのやりとりを見て、菊は微笑み、フラン
シスはいらいらとする。

「はよ見せんかい」

怒ったフランシスがアーサーから紙を取り上げた。

「どれどれ」

フランシスは紙を見る。その脇からアルフレッドも紙を覗いた。

* 歌詞 *

キミを見てるといつもハートDOKI DOKI
揺れる思いはマシユマロみたいにふわ ふわ

いつもがんばる キミの横顔

ずっと見てても 気付かないよね

夢の中なら 二人の距離
縮められるのにな

ああカミサマお願い

二人だけのDream Timeください

お気に入りのうさちゃん抱いて

今夜もオヤスミ

ふわふわ時間 ふわふわ時間

.....

「うおお…体が………かゆっ……!!」
「鳥肌がっ……!」

二人の反応に、アーサーはガンとショックを受けた。

「お、俺としてはいい感じに書けたと思うんだけど…」

「やっぱりダメかなあ…」

アーサーはうるつと瞳に涙を浮かべる。

（（うつ…！））

「ダメっていうかその…なあ？」
フランススは焦る。

「ほらフェリシアーノからも何か言ってくれよ！」

同じく焦るアルフレッドがフェリシアーノの肩に手を置く。

「…すごくいい…」
きらきらきら

（マジでーーーー？！）

「いや…だってこれだよ？」

ふわふわ時間タイムだよ？」

「うんっ！」

なおも表情を輝かせるフェリシアーノにアルフレッドが聞きなおした。

「俺はすっごく好きだよこの歌詞！」

フェリシアーノが、がしつとアーサーの手をにぎる。

「ほ…ほんとか？」

「き　菊はどう思うっ？」

アルフレッドが菊のほうを向く。

ほわー…

(超うつとりしてるーー?!)

「…菊も気に入ったのかい？」

「はいっ」

「正直こういうのアリだと思う？」

「ええ」

(だって二人とも…)

こんなに楽しそうなんですもの)

菊ビジョンではフェリシアーノとアーサーがBLに見えます

「本人同士がいいならいいんじゃないでしょうかっ！」

「君は何を言ってるんだい」

目を輝かせる菊に、アルフレッドが言った。

第13話（後書き）

有難うございましたー！

替え歌なんてサービス作者にはないよ！

ふわふわタイムすきだ…

次回も頑張りまーす！

第14話（前書き）

久しぶりすぎますね。すみません…他の小説ばかりだったりして
るので…本当すみません。

では本編どうぞ。

第14話

「フランスはこの詞はないと思うよね？」

アルフレッドが尋ねる。

「そ　そうだな」

「なあみんな、もう少し考え直したほうが……」

アルフレッドが言う。

(…さてよ?)

考えるのはフランスだ。

(こついうきやぴきやぴした曲好きって言った方が、俺のイメージ上がるのかも！)

「お　俺もこの詞好きかもー」

「あれえ?!」

「それじゃもうこの歌詞でいくか……」

トホホ…とアルフレッドが言うと、わーい、と喜ぶフェリシアーノと菊。

「それじゃアーサーがボーカルってことで」

「えっ?!」

アルフレッドの言葉にアーサーが驚く。

「お、俺は無理だっ!!」

「なんでだい？」

慌てるアーサーにアルフレッドが聞く。

「こんな恥ずかしい歌詞なんて歌えねえよお！」

「おい 作者」

「アーサーがだめとなると…」

アルフレッドが振り向くと、きらきらと顔を輝かせるフェリシアーノと目が合う。

「…フェリシアーノやってみるかい？」

「お、俺?!」

驚きながらもどこか嬉しそうなフェリシアーノ。

「でも俺そんな歌うまくないし…俺なんかがつとまるかどうか…」

そう言うフェリシアーノの顔はにやけている。

「じゃあ菊やってみるかい？」

あっさり

「ごめん!歌う!歌いたいですー!!」

「それじゃあちよつと歌ってみよう!」

「らじゃーっ!」

ビシッと敬礼のポーズになるフェリシアーノ。

「キミを見てると いつも…」

「フェリシアーノちよつとちよつと」

歌い出したフェリシアーノに、アルフレッドが制止の声をかける。

「ギター弾きながら歌わないと」

「あ、忘れてた」

えへー、と眉をハの字にして笑うフェリシアーノ。

じゃかじゃかじゃか

「今度は歌忘れてるぞ」

一生懸命ギターを弾くフェリシアーノにアーサーが言った。

「ギター弾きながら一緒に歌歌えない…」

ずーんと沈むフェリシアーノ。

「…仕方ないなあ…」

フランスがずっとフェリシアーノのそばにしゃがむ。

「先生が一週間つきっきりで特訓してあげる！」

「先生っ！！」

自分の肩をがしっとつかむフランスに、目を輝かせるフェリシアーノ。

「それじゃまず歯ギターのやり方は…」

「それはいいです」

- 1週間後 -

「みんな！待たせたな！」

ガラッと部室の扉を開けたのはフランスだった。

「さあフェリシアーノっ！」

フランスの言葉に、フェリシアーノがこくつと頷く。

ギヤイイイインッ

「おおーっ！ギター上達してる！！」

アーサーが驚きの声をあげる。

「（ガラ声）キミを見てると いつもハートDOKI DOKI
…」

フェリシアーノのガラ声に、みんながずっとこけた。

「いやー練習させすぎちゃった」

「（ガラ声）声 枯れちゃった」

「だめじゃないか!!」

そろって てへっ と舌を出す2人にツッコむアルフレッド。

「それじゃ ボーカルどうするんですか？」

菊があせった顔でアルフレッドに言う。

「う~~~~ん…」

腕を組み考え込むアルフレッド。

「…やっぱり歌詞作ったアーサーが歌うしかないんじゃないかい？」

「へ？」

サッと青ざめるアーサー。

ぶしゅーーーーー…

「おおおい!!…!!」

頭から湯気を出して倒れていくアーサーに、アルフレッドは叫ぶのだった。

本番まであと3日

第14話（後書き）

次回文化祭本番です。

アーサーかわいいよアーサー

第15話（前書き）

さあ皆さん、学園祭ですよ...！

最近アニメけいおん！！が楽しいです。脳内変換おつwww
アニメ見ると小説かきたくなります。

では本編どうぞ。

第15話

・学園祭当日・

「うわーっ

人いっぱいいるよお…緊張してきたあ」

フェリシアーノが舞台の幕間から客席を見て言う。

「よし　今こそ練習の成果を見せる時だぞー!」

「うんっ!」

ガッツポーズをするアルフレッドとフェリシアーノ。

「…お…おいアル…」

すると、扉の陰にこそこそと隠れるようにしているアーサーがアルフレッドに声をかけた。

「ん?なんだいアーサー?」

「なんだ、って、その…」

アルフレッドが尋ねれば、アーサーは顔を赤くしてさらに隠れてしまふ。

「あーもう、なに恥ずかしがってるんだい?!」

「うわっ?!」

アルフレッドがアーサーの手を引いて、扉の陰から引つ張り出す。

「な、なに恥ずかしがってるんだ、って、お前こそ、

なんでこんな格好で平気なんだよっ!!」

そう言うアーサーの格好は、

白い布の丈の短いワンピースのような服に、茶色のサンダル、背中
には白い羽根、頭には金（というか黄）のわっかという、まあ分か
りやすく言えばブリタニアエンジェルの格好だった。

ちなみにアルフレッドは悪魔（結構露出あり）、フェリシアーノは
魔女（というか魔法使い）、菊はシスターという格好だ。

そう言う衣装なので、みんな人前だと相当恥ずかしいだろう。

「うぷぷっ！良く似合ってるんだぞアーサーっ」

そう言って笑うアルフレッドの頭に、アーサーの必殺チョップが炸
裂した。

- 3時間前 -

「じゃ　これ体育館まで運んで下さい」

部室の前、菊がフェリシアーノにアンプを手渡す。

「おわっ！」

「ああ、重いから気をつけて下さいね」

フェリシアーノがアンプの重さで前のめりになる。

「ヴェー、そういえばアーサーは？」

「ああ、アーサーさんには他の事をやって貰っているそうですよ」

「今のアーサーさんには危なっかしくて機材運ばせられないですからね……」

「あー……」

《（ふらふら……）　俺がボーカル……　ガシャーン！　機材を落とす音》

今のアーサーが　のようになることは、容易に想像できた。

「それにしても……」

よろよろとアンプを運びながらフェリシアーノは呟く。

「なんでアンプってこんなに重たいんだろう……」

フェリシアーノはその場にアンプを置き、ふーっと息をつく。

そしてふと横を見ると、

）

鼻歌を歌いながらドラムを運ぶアルフレッドの姿があった。

（あ…汗一つかかずに…！）

「ん？どうしたんだいフェリシアーノ？」

「はあー運び終わった〜」

ぺたん、と床に座り込むフェリシアーノ。

「お疲れ様です、お茶入れましたよ」

「さすが菊！」

お茶とお菓子がのったお盆を持った菊を見て、フェリシアーノは立ち上がった。

お茶の最中。

「そういえば、アルフレッドってアーサーのことよく知ってるよね」「そりゃ幼なじみだからねー」

「幼稚園からずっと一緒だし…あれ？小学校からだっけ？」
「幼なじみ…だよね？」

「アーサーって小さい頃から恥ずかしがり屋さんだったの？」
「そっだぞー」

俺が

『うわー　きれいなかみだねー！』

…って言ったり

『すごい　ひだりききなんだー』

みんなー！アーサーすごいよー』

…っって言ったら

「顔真つ赤にして恥ずかしがっていたもんなー」

「いやそれアルフレッドのせいじゃん！！」

あははー、と笑うアルフレッドに、フェリシアーノがツツコミを入れた。

「機材運ぶの終わったか？」

「ヴェ、アーサー！」

ガラツと扉が開いて、入ってきたのはアーサーだった。

「お？なんか落ち着いてるじゃないか」

「ん？」

「あんなボーカルするの嫌がってたのに」

「そんな、子供じゃないんだしよ」

アーサーは自分の椅子に座る。

「いつまでも、動揺して、いられない、っつの」

そう言うアーサーの声と手は震えていて、手に持ったカップと受け皿がカチャカチャと音を立てていた。

（めっちゃくちゃ動揺してるじゃないかー！！）

「そんな調子でどうするんだよ……」

「もう嫌だ……」

ずーんと暗くなるアーサー。

「アル！俺とボーカル代わってくれ！」

「……したらドラムどうするんだい」

「俺がやるから！」

「んじゃベースどうするんだい！」

「それも俺がやるから！！！」

「おーやつてもらおうか！！！」

むしろ見てみたいよ！！！！」

そうして涙目のアーサーと言い合いするアルフレッドだった……

第15話（後書き）

最初の幕間で控えてるところが一番かいてて楽しかったです。
ここの衣装は前から考えてたので、かけて嬉しいです。

次回本番です

第16話（前書き）

第16話です！

これUPしたとき夏祭りの最中とかね。

では本編どうぞ！

第16話

泣いてすがりつくアーサーをなんとか剥がそうとアルフレッドが苦戦していると、扉がガラツと開いた。

「みんないるな!!」

入って来たのはフランススだった。

「先生どこしたの?」

口のまわりにクリームがついているフェリシアーノが首を傾げる。

「ふふふふ…」

「不本意ながらも軽音部の顧問になったことだし、何か手伝うことはないかと思って、

衣装作ってきましたーっ!!」

ばーん、と衣装を取り出すフランスス。

（ノリノリだ!!!）

「いや…先生、気持ちは有難いんだけど…」
アルフレッドが言う。

「ちょっとタイミング悪かったかな…」

アルフレッドが振り向くと、案の定

「あんな服着て歌うの？」

という顔で真っ白になっているアーサーがいた。

「うーん…これはお気に召さなかったかあ…」

フランスの言葉に、アーサーはこくこくと頷く。

「じゃあ俺の昔の衣装はどう？」

「あーやっぱりさっきの服着たくなってきたーっ!!」

フランスの昔の衣装を見たアーサーが涙目で言った。

「ストップ、フランスス!!」

びしっ、とアルフレッドが腕を突き出して言う。

「こんな衣装アーサーじゃなくても着るの恥ずかしいよ!!」

「だ、だよな!」

アーサーが、アルフレッドの自分への賛同にほっとする。

「そうかなあ…頑張って作ったんだけどなあ…」

…それに」

フランススがフェリシアーノたちの方を見る。

「フェリシアーノたちは喜んで着てるぞ」

「君たちーっ！！！」

セーラー服やナース服を恥じらいもなく着ているフェリシアーノと菊に、アルフレッドの怒鳴り声がとんだ。

・そして本番・

客席はすでにわいわいと賑わっている。

「よし みんな いくぞーっ！！」

「「おーっ！！」」

アルフレッドの声に、みんなが腕を突き上げた。

アーサーは、緊張によりぶるぶると震えていた。

「まだ緊張してるの？」

ひょこつとフランススが現れる。

「あ、アーサーだって分からないようにメイクしてやるっか」
「いつてきまーすっ！！！！」

ふふふと黒い笑みを浮かべるフランスに、アーサーは冷や汗をかきながら舞台へと出た。

アーサーがマイクの前に立った瞬間、わあああつ、と客席から歓声上がる。

（だ…だめだ…！）

顔を真っ赤にして、アーサーは緊張に耐えていた。

「アーサーっ…！」

そんなアーサーに、フェリシアーノが隣から声をかける。

「俺　アーサーが頑張って練習してたの知ってるから！」

「絶対大丈夫だよ！」

がんばろう！」

こくり、とアーサーがアルフレッドに頷いて、合図を送る。

「1・2・3・4!!」

カツ、カツ、とスティックを鳴らして、演奏が始まった。

『キミを見てると　いつもハートDOKI DOKI!』

わあああつ、と客席から歓声が上がった。

『みんな、ありがとう』

額から汗を伝わせながら、アーサーが言う。

（これでアーサーも恥ずかしがり克服できそうだな）

それを見て、アルフレッドが思う。

そして、退場しようと舞台を歩いていた時。

ガッ!とアーサーはコードに足をひっかけてしまい、びたんっ!!

と派手に転んでしまった。

「きゃんっ!!」

あいたたたたた…」

と、アーサーがなんだか騒がしい客席を振り向く。

「…え？」

読者の皆さん、アーサーが今着ている衣装を覚えていらっしゃるだろうか。そう、その衣装なわけだから、当然、スカートのようになっているのだ。

つまり、コケた状態の今、客席からは

パンツ丸見え

ということである。

「うつ…」

わあああああああ!?!?!」

…こうして、今年の学園祭は幕を閉じました…

- 翌日 -

「みんな　　昨日はお疲れ様なんだぞ！」

部室にて、アルフレッドがみんなに言う。

「フェリシアーノは初ライブにしてはなかなかのものだったよ！」
「いやー…」

そう言つてフェリシアーノは照れくさそうにする。

「アーサーはファンクラブまでできたらしいぞ！」

「わーっ！凄いですね！」

“アーサーたんファンクラブ会員募集中！”というポスターを見て、
菊が感嘆の声を上げる。

「…当の本人は再起不能だけどね…」

部屋のすみでどよんと体育座りをしているアーサーを見て、みんなが「あゝあ」という顔をした。

第16話（後書き）

有難うございました！

アーサーかわいいよアーサー。

次回クリスマス会編

第17話（前書き）

へたおんの投稿：久しぶりすぎます…！
アニメけいおんももうすぐ終わりですか…はあ…
こっちはまだ単行本1巻も終わってないというのに…

第17話

「みんなー、クリスマス会のチラシ作ったぞーっ」

12月のある日、部屋に入ってくるなりアルフレッドがそう言った。

…？

三人はクエスチョンマークを浮かべた。

「…あれ？クリスマス会ってやることになってたのか？」

「私も聞いてませんでしたけど…」

チラシを見て、アーサーと菊が言う。

「だって誰にも言っていないからね」

「言えよ」

「おいおい…場所勝手に菊の家に決めちまって大丈夫なのか？」

チラシには、“場所：菊の家”となっている。

「あの…その日は都合悪いんですけど…」

「あ…やっぱりだめだったかい？」

「その…」

うちには常に何かしらの予定が詰まっているので、一ヶ月前に予約とらないといけないんです…

本当にごめんなさい」

「そ…そうなのか」

（（どんな家?!））

「アルフレッドさんの家はどんなんですか？」

「あゝダメダメ」

菊が問うと、アルフレッドではなくアーサーが答えた。

「アルフレッドの家は汚くて足の踏み場もねえから」

「なんだとーっ?!」

アーサーの言葉にアルフレッドが叫ぶ。

「なんだよっ！アーサーの部屋なんか服が脱ぎ散らかってるくせにっパンツとか」

「ま 真顔ででたらめ言っな!!」

ぎゃーぎゃー!!

「フ…フェリシアーノ君のおうちはどうですか？」

「別にいいよ？」

あっさり

「でも クリスマスに大人数で押しかけて大丈夫なのか？」

「うん その日は両親いないから」

「そういえば前にフェリシアーノの家行った時もお両親いなかったよね」

「そういえばそうだな」

アルフレッドとアーサーは言う。

「共働きとか？」

「あ、いやそういうのじゃなくて…」

アルフレッドの問いに、フェリシアーノは両手を左右に振る。

「うちの両親、よく二人で旅行するんだ…」

クリスマスはドイツ行くんだって」

（（ラブラブ夫婦！！））

「料理の準備は俺に任せて！」

「大丈夫かい？」

胸をはるフェリシアーノに、アルフレッドは笑いながら言う。

「あ！あれやらないかい、プレゼント交換！」

「ああ、いいですね」

アルフレッドの提案に、菊が賛同する。

「アーサー、変なもの持って来ないでくれよ！」

「…それはお前だろ」

アーサーが少し眉をひそめる。

「小学校のとき、アルから貰ったプレゼント開けたら…
中から『びよーん』って…」

…要はびっくり箱だったらしい。

(…ベタだなあ…)

- 帰り道 -

「うお…寒くなったねえ」
アルフレッドが言う。

「あつ！」

「ルーター！」

フェリシアーノは、道の先にいたルートヴィツヒを見つけて、駆け
ていった。

「フェリシアーノたちも今帰りか？」

「うん！そうだよ！」

「部室でクリスマス会のことを話してて…あ、そうだ！」

ルートヴィツヒも軽音部のクリスマス会に参加しないかい？」

「え…俺は部外者だが…いいのか？」

「全然いいんだぞ！フェリシアーノの友達だし！」

（ぼそつ）人数増えたほうが会費増えるし」

「それをどうする気だ」

アルフレッドの呟きが聞こえたアーサーは、そうツツコミを入れた。

《それから俺はみんなと分かれたあと、ルートと二人でプレゼント
交換用のプレゼントを買いにいきました》

「あ、これ可愛いー！」

とある店で、置いてあったぬいぐるみを見てフェリシアーノが言う。

「ルートお、俺これにする〜」

「だが、自分に当たるとは限らんぞ？」

「あ、そっか…」

じゃあこれでいいや」

「おい」

フェリシアーノは、某育成系携帯ゲーム機のキャラクターのようなぬいぐるみをつまんで唇を尖らせた。

第17話（後書き）

中途半端だ…

次回クリスマス会です！

第18話（前書き）

更新遅くなってすみません…クリスマス会当日です！
フランが若干アレですが、まあ温かい目で見て下さると有り難いです。

第18話

・クリスマス会当日・

「やつほーっ

フェリシアーノー来たんだぞー!」

フェリシアーノの家に、3人はやって来ていた。

「いらっしやい皆さん」

「あ　ロヴィーノ!お邪魔しまーす」

「いえいえ、楽しんで行つて下さい。」

あ、じゃがい…じゃなくて、ルートヴィッヒさんは少し遅れるそうですよ」

「?そうなのか!ところでフェリシアーノは?」

「おーいつ皆あがつて」

リビングのほうから、フェリシアーノの声がする。

がちゃ

「フェリシアーノー!

…つて…

なにしてるんだい?」

「ヴえー…

やり出したら止まらなくなっちゃって」

そこには、輪っかの飾りを長々と作っているフェリシアーノの姿があった。

「うわー料理すごいんだぞー!!」

「凄いでしょ！頑張ったんだよ！」

「兄貴じゃなくて俺が、な」

フェリシアーノの言葉に、ロヴィーノは冷静にツツコミを入れる。

「あ…やっぱりロヴィーノが作ったんだな」

「失礼な！！俺だって手伝ったよ！」

アーサーの言葉に、フェリシアーノが言う。

「じゃあ、フェリシアーノはどれ作ったんだ？」

「このケーキ！！」

「ワオ 凄いね！！」

「……の上にいちご乗せました」

「…俺の言った『凄いね』を返してくれ」

「メリーー」

クリスマース！！」

かんつとグラスが鳴る。

「いやー…今年も終わっちゃうねー」

「やだなあ親父くさい」
アルフレッドの一言に、フランスがくすくすと笑ってから、料理をもぐもぐと食べる。

.....

もぐもぐ

「おわーっフランス?!」

「これ美味しいね
おかわり貰える？」

驚くアルフレッドを尻目に、フランスはロヴィーノに料理のおかわりを頼んでいた。

「全く 顧問を呼ばないなんてどういうこと？」
フランスはぼこぼこ怒る。

「い...いやあ...忘れてたわけじゃないんだけど...」
アルフレッドは苦笑する。

「先生は彼女と予定があると思って
呼ばなかったんだよ！」

めきっ

フェリシアーノの言葉に、笑顔でフランスはフォークを曲げた。

「そんなこと言うのはこの口かああああっ?!」
ぎゅー……

「は、はれー（あれー）？」

（……天然はすごい……）

フランスに両頬をつねられるフェリシアーノに、アルフレッドはそんなことを思った。

「罰としてフェリシアーノはこれに着替えなさい」

「なんでそんなの持ってるのさ……」

フランスがどこから取り出したのは、ヘソ出しミニスカサントの衣装だった。

「着替え中」

「……ど、どうかな？」

着替えが済んだフェリシアーノが、少し頬を染めながら言う。

まあ確かに似合ってはいる。
似合ってはいるのだが。

「……駄目だな！」

フェリシアーノは恥じらいが足りない!」

フランスの言葉に、ガーン、と軽くショックを受けるフェリシアーノ。

「…ここはやっぱり…」

「ひっ?!」

フランスににやりと見られたアーサーは、ビクツと反応する。

じりっ、と近付いてくるフランスにアーサーは後ずさりし、そしてダツと逃げ出した。

「あっ!

こらあ!! 逃げるな!!」

「そりゃ逃げますよっ!!」

ドタバタとアーサーとフランスのあいかけっこが始まった。

「と、うわっ?!」

アーサーがつまづく。

「はっはあ!つかまえたあ!さあおとなしくミニスカサントに着替えろ!」

「嫌ですよ!」

「む、だったら着替えさせるまで!」

「うわなにしゃが、ぎゃあああセクハラー!!」

「すまない、遅くなった」

騒がしい中、がちやりと扉が開いて、ルートヴィッヒが入ってきた。

そこには、アーサーの服を脱がそうとアーサーに覆い被さっているフランスと、そのフランスの下で涙目になり服を脱がされかけているアーサーの姿。

.....

ルートヴィッヒは扉を開いたポーズのまま数秒固まって、

「...すまない、間違えた...」

と言ってボタンと扉を閉めた。

「間違ってない！助けるルートヴィッヒいつ！」

アーサーの悲痛な叫びが、部屋に響いた...

「さーて、気を取り直してプレゼント交換でもしようか！」

「そうですね」

「うう...もつお嬢に行けない...」

涙声でそう言うアーサーを尻目にしたアルフレッドの提案に、菊も賛同する。

「あ、でも先生は…？」

「大丈夫！」

ほら、ちゃんと用意してきたんだ！」

「おー さすが！」

プレゼントの箱を出すフランシスに、アルフレッドが言う。

「…本当は今日、彼女に渡すつもりのもり物だったんだけど…」

(…重たい…!!)

「それじゃ始めるぞ…！」
やけくそ

「ああ…うん…」

フランシスのやけくそな一言で、プレゼント交換が始まった。

「お、俺はアーサーのだな」

「あ…先生それは…！」

アーサーは止めようとしたがすでに遅く、フランシスは箱を開けてしまった。

びよーん びよーん

.....

「あはははは最高のクリスマスだなーーーーっ!!」
「うわーっ 先生が壊れたあーーーーっ!!」

そうして騒がしく過ぎていくクリスマスの夜だった...

第18話（後書き）

有難うございました！

しかし、アニメけいおんも終わっちゃったし、こっちも頑張って早く進めないとけいおんブーム去っちゃうよな〜と思いつつ小説かいてます。

次回も頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2271k/>

へたおん！

2010年11月1日11時58分発行